

領域開拓プログラム（研究テーマ公募型研究テーマ）

◆課題：「パンデミックなど世界規模の災禍への人間社会の対応と課題」

◆研究テーマ：「新型コロナウイルスに関する主観的報告コーパスの自然言語処理による現象学的分析」

研究期間：R2.10～R5.3

委託費総額：14,625千円

## < 研究代表者 >

トム・フロース：沖縄科学技術大学院大学身体性認知科学ユニット／准教授  
< 専門分野 >



認知科学博士

コンピューター科学と複雑系にバックグラウンドを持つ認知科学者。特に認知における社会的相互作用の役割の研究で知られている。

< Webページ >

[トム・フロース（身体性認知科学ユニット）](#)

## < 研究目的・概要 >

長引く厳しい社会的距離の必要性は、現行パンデミックの特に困難な側面となっている。



社会的距離によって生じるネガティブな影響を緩和するためには、その影響をよりよく理解することが必要不可欠

- 社会的距離の影響について人々が記述した主観的報告の大規模な多文化コーパスを収集し、その分析を行う
- コーパス分析の為に国際的で学際的なプロジェクトチームを組織
- 自然言語処理における最新の計算手法と現象学及び精神病理学の概念フレームワークを組み合わせる



社会的距離が人間の体験に与える詳細な知見、オンラインテクノロジーへの信頼を含む最も効果的な対処戦略についての新たな洞察などが成果として期待される

## < 研究計画の特徴 >

本研究の新規性は、近年のコンピュータサイエンスの進歩に伴う人文科学の手法を融合させ、特に自然言語処理を主観的報告の大規模コーパスの分析に応用している点である。コーパスは2,543人の参加者からの災禍における主観的な体験報告で構成されており、50万語以上の日本語、英語、スペイン語の3言語から成り立つ。これにより、大規模な異文化間の社会的距離の影響の調査が可能となる。

## < 目標とする研究成果 >

(1) 社会的距離が人間の体験に与える詳細な知見

主な目標として、人々が社会的距離にどのように反応し対処するかについて、類似点や相違点を明らかにする。

(2) オンラインテクノロジーへの信頼を含む最も効果的な対処戦略についての新たな洞察

もう一つの重要な目標は、ビデオチャットやソーシャルメディアの成果を評価し、対面での交流の不足を補うことである。

## < 将来展望 >

人々が社会的距離によってどのような影響を受け、その悪影響をどのように補えるのかについて理解を深めることにより、将来の災禍への対応について情報を得ることができる。具体的には、社会的相互作用をより良く伝えるオンライン技術の開発を加速させることができる。